



新年のご挨拶

石原重利*

会員の皆様、あけましておめでとうございます。

日本鉄鋼協会は昨年の記念すべき70周年を終え、ここに新しい年を迎えました。会員諸兄も70年の歴史の重みをそれぞれにかみしめられ、技術・研究へのいつそうの熱意をかきたてられたことと思います。私もひきつづき努力を傾注し協会の活動を更に実りあるものにしてゆきたいと念願しております。

新春にあたり昨年一年をいささか回顧してみたいと思います。

本会の主要行事である講演大会は昨年も盛大に行われました。発表講演数は春秋合わせて1722件の多きを数えました。このうちには新しく採り上げました萌芽・境界技術に関するものが144件も含まれており、研究者・技術者の相互啓発に大きく寄与致しました。

一方共同研究会も分科会をふくめて94回の会合が行われ、活発な討議を通して我が国鉄鋼業発展の一翼を担いました。また兼ねての懸念であつた表面処理部門についても昨秋亜鉛めつき鋼板部会の設立が決定され、新年早々には最初の部会開催が予定されております。今後の発展を切に期待して止みません。

なお各支部におきましても活発な活動を行つていただきました。講演大会、共同研究会あるいは支部会合などいずれも技術の進歩を促す対話・討論の場であり、今後とも対話の盛んな協会を指向してゆきたいと考えております。

機関誌「鉄と鋼」ならびに「Trans. ISIJ」もますます充実し内外より高い評価を得ております。特に昨年は70周年特集として「鉄鋼技術の進歩」が刊行されまた英文にも翻訳配布されました。恐らく各国会員からも大きな反響を呼ぶものと思つております。

鉄鋼に関する基礎的研究の場として設けられている「鉄鋼基礎共同研究会」および「特定基礎研究会」はかねてより大きな成果をあげておりますが、本年もまた幾つかの新しいテーマに取り組むことになっております。この労作は並大抵のものではないと思いますが、これは鉄鋼技術の着実な進展には不可欠のものであり、本年もまた関係各位のご努力をお願いしたいと思います。

またその他の委員会も地道な活動をつづけており、更に鉄鋼技術情報センターの活動も標準化委員会のそれとともに評価されるところであります。

鉄鋼技術に関する国際交流もまた協会の果すべき役割の一つであります。日本の鉄鋼業ならびに鉄鋼技術の世界的ポジションからみて、協会としても逐年国際交流には努力を傾注しております。昨年は第3回鉄鋼圧延国際会議(9月東京)を初めとして第3回日中铁鋼学術会議(4月洛陽)、第10回日ソ製鋼物化学シンポジウム(6月東京)、日本・スウェーデン鉄鋼技術会議(4月東京)、日本・カナダ鉄鋼

* 本会会長 新日本製鉄(株)常任顧問

技術会議 (12 月東京) が開催されました。後の二者はいずれも相手国からの申し入れにより持たれたものですが、我が国技術者にとつても啓発されるところ少なからざるものがあつたと聞いております。国際交流は純粋に技術的な討議だけでなく日本の鉄鋼そのものを理解してもらうためにも極めて有意義であり、今後とも積極的に取り組んでいきたいと考えております。

ISO 事務局業務も昨年一年順調に推移しました。本業務の成功は恐らく日本鉄鋼業の国際性について大きな評価をうけることになりましょう。

以上概観しましたように、協会の活動は順調に進められこの一年大きな足跡を残しました。実際にお世話いただいております役員・委員の方々に厚く御礼申し上げるとともに、今後ともよろしく願い致したく存じます。

さて、私は 2 年前の会長就任にあたり二つのことについて検討するよう企画委員長にお願い致しました。

一つは国際交流のあり方についてであります。会議形式による国際交流は、二国間ではなくもつと各国技術者にオープンにすべきではないか、また日本で開催して日本を見てもらう機会を多くした方がよい、というのが私の考え方ですが、その後国際交流事業検討委員会 (堀川一男委員長) において幅広く前向きな検討が行われ今後の路線も整理されて、昨秋正式に国際交流委員会の誕生を見るに至りました。この事業は各国学協会との調整その他決して易々たる道ではないと思われませんが、これからの日本鉄鋼業の置かれるであろう立場を考え、長中期計画のもとに着実に進めていつてほしいと考えます。会員各位も積極的に参画できるよう委員会としても配慮してほしいと思います。

もう一つは産学連携についてであります。もちろん協会としても従来より両者の連携を強力に進めてきております。調査研究小委員会の活動もそうですし講演大会も二国間シンポジウムもそうだと言えましょう。基礎共研もまさにこれに該当します。しかし将来を見つめた場合これで十分かどうか、協会こそ基本的にこれに貢献できる立場にあるわけで、十分検討してみしてほしいというわけです。これに関してはその後産学連携促進検討 WG (伊藤慶典主査) の方であらゆる角度からの検討がなされております。本稿をかいている時点では WG の原案について最終的結論が出されておられません、恐らくその方向にすすむと考えられます。これからの研究のあり方・方向は、特に基礎研究のそれはずつと先の鉄鋼技術の姿に大きく関わつてくると言えましょう。協会としても常に息ながく関心を保持すべき主題だと思つてほしいです。

前にも概括したように、協会の活動はよく機能していると考えます。協会は会員のためのものであり、会員は、自ら協会の活動を更に盛り上げることによつてあるいはまた協会の活動がすぐれた深く討議された企画によつていつそう盛り上ることによつて、新しく研さんに励み新しい力を創り出してゆくという風に理解するものですが、このためには会員各位がいつそう協会の活動に関心をもつていただき、同時に各位からの絶大なる協力をいただきたいと思つております。一言で言えばわれわれの鉄鋼協会であつてほしいと念願するわけです。

終わりに、日本の鉄鋼技術発展のため技術・研究に精励しておられる会員各位のいつそうのご健勝と協会の更に実りある活動を祈念致しまして、新年のご挨拶といたします。